

「牛づくり、草づくり、土づくり」 日本一の酪農経営を目指して



青木 雄治（あおき・ゆうじ）
埼玉県大里郡妻沼町

< 推薦理由 >

青木雄治氏が経営する「青木牧場」は、氏の父親である青木竹雄氏が昭和23年に水田、畑作農業の多角化を目指して乳牛子牛を飼養したのが始まりで、以来、着実に経営規模の拡大と技術の集積を重ね、現在では、本県酪農を代表する酪農家である。

青木牧場の特徴として

経営の継承体制が非常に順調に進んでいること

父親は、非常に熱心な酪農家であり、草創期の本県酪農の指導的活動を行ってきたが、青木雄治氏も迷うことなく経営を継承し、さらに現在では、その息子も経営に参画し、現場の中心として活動している。このことは、後継者難から廃業する経営が多い中で、むしろ希有な事例でもあり、氏の経営内容が充実し、魅力あるものであることの証でもある。

乳牛改良に熱心に取り組んでいること

氏は、昭和39年に経営に参画した。同時に改良の重要性を認識し、県内生産子牛の基礎登録から開始した。その系統を基に現在まで改良を重ね、今年度、ついにエクセレント牛を誕生させるに至った。経営内の改良の積み重ねでエクセレント牛を作ることは非常に困難とされ、その長年にわたる努力は称賛に値するものである。

自給飼料の生産に積極的に取り組んでいること

粗飼料生産基盤の弱体な本県にあって、利根川河川敷20haを活用し、良質粗飼料の生産を行い、通年サイレージ給与を可能とするなど、飼料自給率向上が叫ばれる現在、模範的な経営である。

環境問題の対策を重点的に行なっていること

都市化の激しい本県にあっては、環境対策が経営存続の鍵とあって良いが、氏は、消費者が遊びに来たいような牛舎風景の設置や、幼稚園、小学校の見学を受け入れるなど、地域との融和を積極的に行なっている。また、地域耕種農家との連携のもとに、農場副産物の堆肥化とその利用体制を整え、地域農業と一体となった経営に努めるなど、環境問題には十分に意を用いている。

など、本県の酪農経営の課題解決にとって、まさに模範的な経営を行なっており、すでに後継者も就農するなど、今後とも非常に安定した経営の継続が約束されている状況である。

また、地域の若手経営者の相談相手として、さらに、酪農を目指す若者の研修の受入れなど、本県酪農の中核的役割を担っているところであり、今後、酪農経営を目指す若者にとって、一つの指標となるものであらうと思料し、推薦するものである。

(埼玉県審査委員会委員長 矢島清史)

< 発表事例の内容 >

1 経営管理技術や特色ある取り組み

本経営の特徴は酪農経営を始めて以来50年、「牛づくり、草づくり、土づくり」を1日たりとも疎かにせず行なってきたという点である。

まず牛づくりにおいては「酪農経営の基本は個体管理にあり」という信念に基づき、酪農開始以来朝夕の搾乳時における個体乳量測定は1日も休んだことがないということである。この記録は大学ノート何冊にもおよび、当牧場で飼養した全ての牛の成績と履歴、戸籍書であり、最も大切な財産となっている。このノートは乳量その他、個体の特徴、繁殖状況、産歴など牛に関する全てのデータが蓄積されており、自家産牛100%、牛群検定1万kgの高泌乳牛群への系統繁殖の歩みとなっている。

その成果は全共出品者の常連となり、またブルーバンブーという冠ネームで個体販売ができるようになると共に、本年5月には日本ホルスタイン登録協会の審査により県内初のエクセレント牛の誕生までになった。

次に草づくりにおいては、国際化の進展や乳価低迷、円安、飼料価格高騰の現在の厳しい酪農経営の環境にあって、経営安定のための必須条件は、いかにして生産コストを下げることである。当牧場は幸い河川敷の利用が可能という条件に恵まれ、約20haの河川敷を利用したロールベール形態の粗飼料自給に努め、年々作付面積を拡大し収量も増加し、現在では通年サイレージ給与が可能となり、生産原価低減に大きく寄与している。

最後に土づくりにおいては、有機堆肥の重要性は酪農を始める前の耕種・野菜農家時代から認識しており、積極的に利用してきた。特に家畜ふんと麦ワラやモミガラを混ぜて発酵させた堆肥は良質で土づくりには最適であった。この堆肥を利用し、田畑に還元し、粗飼料を作り、これを刈り取り乳牛に給与する。このように今言う「地球にやさしい循環型農業」を50年も前から実践してきた。

以上、日本の酪農経営の模範となる様な三拍子そろった経営を歩んできた本牧場の成果は素晴らしいものがある。

2 経営・活動の内容

1) 労働力の構成

(平成13年7月現在)

区 分	続 柄	年 齢	農業従事日数		備 考
				うち畜産部門	
家 族	本 人	57	330	330	
	妻	53	300	300	哺育のみ
	長 男	26	330	330	
	父	81	0	0	
	母	81	0	0	
	孫	4	0	0	
常 雇	な し				
臨時雇	のべ人日		10	10	主な作業内容 飼料給与
労働力計	3 人		970日	970日	

2) 収入等の状況

(平成12年1月～12月)

区 分	種 類 品目名	作付面積 飼養規模	販売量	販売額・ 収入額	収 入 構成比	概ねの 所得率
農業収入	酪 農	37頭	340,992kg	34,521千円	100.0%	40%
農外収入						
合 計			340,992kg	34,521千円	100.0%	

3) 土地所有と利用状況

(単位：a)

区 分		実 面 積		畜産利用地 面 積	備 考	
			うち借地			
個 別 利 用 地	耕 地	田	42			
		畑	150			
		樹園地				
		計	192			
	耕 地 以 外	牧草地	2,000	2,000	2,000	利根川河川敷牧草地
		野草地				
		計	2,000	2,000	2,000	
	畜舎・運動場		80		80	
	そ の 他	山 林				
原 野						
計						
共同利用地						

4) 家畜の飼養状況

(単位：頭)

品 種 区 分	成 牛	育成牛	肥育牛
期 首	33	27	0
期 末	37	24	0
平 均	35	25.5	0

5) 施設等の所有・利用状況

種類	構造 資材 形式能力	棟数 面積数量 台数	取得		所有 区分	備考 (利用状況等)
			年	金額(円)		
畜舎	牛舎	木造	363㎡	S.39.11	1,280,000	自己
	牛舎2	木造・軽鉄	400㎡	S.58.2	22,098,000	〃
	牛舎改築			H.1.12	1,344,000	〃
	牛舎屋根修理			H.5.4	550,000	〃
	育成舎1	木造	1	S.47.11	250,000	〃
	育成舎2	木造	1	S.55.4	1,350,000	〃
	育成舎3	木造	1	H.4.2	1,621,000	〃
施設	堆肥舎1	鉄骨	1	H.8.8	3,188,400	自己
	堆肥舎2	鉄骨	1	S.54.4	700,000	〃
	運動場		1,500㎡	H.4.2	468,000	〃
	地下サイロ1		1	S.51.8	1,848,000	〃
	地下サイロ2		1	S.53.10	2,400,000	〃
	作業車庫		1	S.60.8	1,249,000	〃
機械	トラクター		1	S.58.9	3,480,000	自己
	ショベル		1	S.58.3	1,180,000	〃
	サイドレーキ		1	H.7.12	520,000	〃
	バキュームカー		1	S.51.5	860,000	〃
	ブロードキャスター		1	S.51.5	200,000	〃
	バークリーナー		1	S.58.2	2,500,000	〃
	テッター		1	S.62.4	633,000	〃
	トラクター		1	S.63.1	1,100,000	〃
	軽トラック		1	H.1.3	540,000	〃
	ラウンドベラー		1	H.1.9	2,972,000	〃
	トラック		1	H.2.7	600,000	〃
	ダンプ		1	H.2.3	600,000	〃
	パイプライン		1	H.3.7	3,862,000	〃
	バルククーラー		1	H.5.4	800,000	〃
	ディスクモアー		1	H.5.6	746,000	〃
	パソコン		1	H.9.3	330,000	〃
	ショベルローダー		1	H.10.9	2,400,000	〃
	トラクター		1	H.10.9	6,200,000	〃
	ロールベラー		1	H.12.10	672,500	〃
	軽トラック		1	H.12.2	900,000	〃
ラッピングマシン		1	H.12.8	1,800,000	〃	

6) 経営の推移

年次	作目構成	頭数	経営および活動の推移
昭和23年	水田+畑作+養蚕	1	子牛を飼い、家畜の基本を習う
25年	〃	1	乳牛を飼養し、乳搾りを始める
28年	水田+畑作+養蚕+酪農	5	酪農の基礎を作る
38年	〃	12	酪農中心の経営となる
39年	酪農専業	24	本人が就農し、牛舎を作り規模拡大を図る
39年	〃	24	乳牛の登録を始める (オオサト ハナ アイデアル ミドリ) 基礎牛
50年	〃	24	牛群検定事業に参加
58年	〃	36	新牛舎を建築し増頭する
平成 8年	〃	36	長男就農
10年	〃	36	家族協定を結ぶ
13年	〃	36	県内初のエクセレント牛創出

7) 自給飼料の生産と利用状況

(平成12年6月～平成13年7月)

区分	ほ場 番号	地 目	面積	所有 区分	飼料作物の 作付体系	10a当たり 収量	総収量	主な 利用形態
		河川敷	2,000a	借地	イタリアン クローバー混 リーフグラス (ひえ あね その他) (年3回刈り取り)			ロールバールサイレージ

8) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績

期 間		平成12年 1月～12月		経営実績
経営 の 概 要	労働力員数 (畜産)	家 族(人)		2
		雇 用(人)		0.12
	経産牛平均飼養頭数(頭)		36.6	
	飼料生産用地延べ面積(a)		2,000	
	年間総産乳量(kg)		348,822	
	年間総販売乳量(kg)		340,992	
	年間子牛・育成牛販売頭数(頭)		21	
	年間肥育牛販売頭数(頭)		0	
収 入	酪農部門年間総所得(千円)		15,343	
	経産牛1頭当たり年間所得(円)		419,195	
	所得率(%)		44.4	
益 性	経産牛 1頭当たり	部門収入(円)		943,220
		うち牛乳販売収入(円)		896,477
		売上原価(円)		617,982
		うち購入飼料費(円)		287,132
		うち労働費(円)		120,219
		うち減価償却費(円)		151,936
生 産 性	牛 乳 生 産	経産牛1頭当たり年間産乳量(kg)		9,525
		平均分娩間隔(カ月)		13.95
		受胎に要した種付け回数(回)		1.67
		牛乳1kg当たり平均価格(円)		94.05
		乳脂率(%)		3.82
		無脂乳固形分率(%)		8.81
		体細胞数(万個/ml)		18
		細菌数(万個/ml)		1
	粗 飼 料	経産牛1頭当たり飼料生産延べ面積(a)		54.6
		借入地依存率(%)		100
		飼料TDN自給率(%)		62.7
		乳飼比(育成・その他含む)(%)		32.0
	経産牛1頭当たり投下労働時間(時間)		117.5	
	安 全 性	総借入金残高(期末時)(万円)		194
経産牛1頭当たり借入金残高(期末時)(円)		53,005		
経産牛1頭当たり年間借入金償還負担額(円)		0		

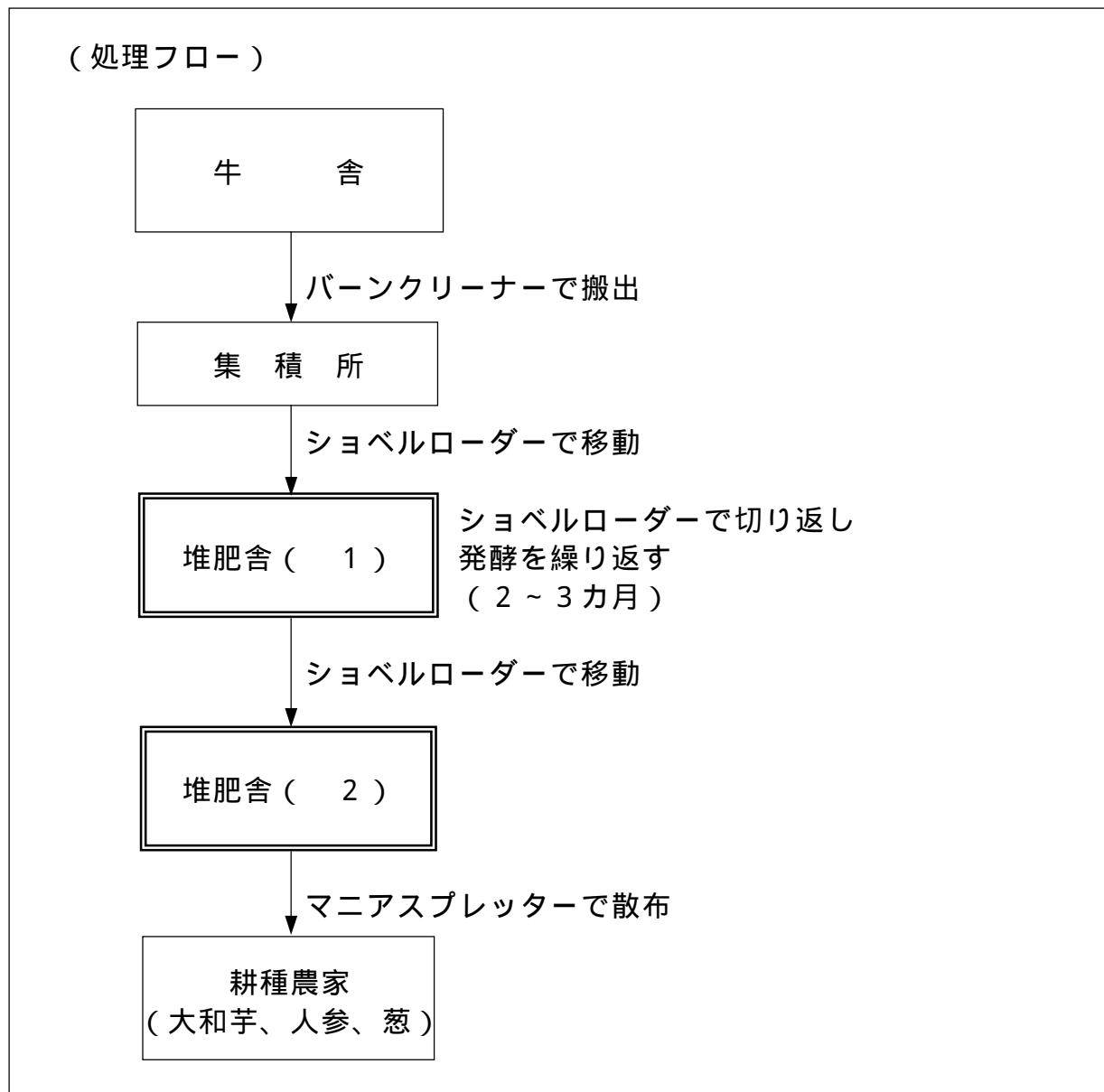
(2) 技術等の概要

経営類型	草地依存型
畜舎様式	つなぎ式
搾乳方式	パイプライン方式
自家配合の実施（TMRの実施）	なし
共同育成牧場の活用の有無	なし
採食を伴う放牧の実施	なし
協業・共同作業の実施	ふん尿処理
施設・機器等共同利用の実施	なし
牛群検定事業への参加の有無	全頭参加
生産部門以外の取り組み	なし
E Tの活用	あり
F1生産	あり
肥育部門の実施	なし

3 家畜排せつ物処理・利用方法と環境保全対策

1) 家畜排せつ物の処理方法

当初より敷料については麦ワラ、モミガラを利用し、生ふん尿を混合したものをバークリーナーで牛舎外へ搬出する。ショベルローダーで堆肥舎へ運び、1週間に1回程度切り返し発酵させる。2～3カ月切り返しを繰り返していると、良質の堆肥が出来上がる。



2) 家畜排せつ物の利活用

内 容	割合 (%)	品質等 (堆肥化に要する期間等)
販 売	60	完熟良質堆肥 (自然発酵 2 ~ 3 カ月)
交 換		
無償譲渡		
自家利用	40	完熟良質堆肥 (自然発酵 2 ~ 3 カ月)
そ の 他		

3) 評価と課題

(1) 処理・利活用に関する評価

麦ワラ、モミガラ等が入り家畜ふん尿と長時間かけて発酵処理させ、良質の堆肥化処理を実践しているので利用者側の評判も良い。また河川敷草地への自家利用堆肥としても活用している。

(2) 課 題

堆肥の需要は春と秋に集中している事により、どうしても堆肥の保管場所が問題となる。現在は2棟の堆肥舎があり、有効活用しているが冬期における堆肥ストック場所としてもう1棟堆肥舎があれば理想的である。

4) その他

北海道の広々とした牧歌的なイメージにこだわり、牛舎は赤い屋根のキング式牛舎を建てた。隣接して放牧場を作り、囲いを緑の木々で仕切り、地域に調和した酪農経営を目指している。

また、牛舎内部についても清掃に心がけ、悪臭・害虫等の環境問題の発生には十分注意し、また麦ワラの敷料も多めに使い、牛が清潔でいるように努力している。

4 地域農業や地域社会との協調・融和についての活動内容

地域農業の中においては酪農専業ということであり、地域の中核的農家のリーダーであり、中心となって活躍している。特にこの地域は大規模な野菜・耕種の専業農家が多いことから堆肥の需要も多く、青木牧場の堆肥の評判も良く利用されている。大和イモ、ニンジン、ネギ等の作目には青木牧場の混合堆肥の利用者が多く、良質の有機野菜ができると喜ばれている。

また、麦ワラやモミガラの農場残さも有効利用し、これがまた地域社会との協調に結びついている。

一方、社会活動においては専門酪農協の理事として長年に渡り酪農振興に寄与してきたが、昨年より総合農協の理事としてさらに広い見地に立って、地域農業と係わる様になった。また、奥さんも酪農婦人部として様々な行事に積極的に参加し活

躍するとともに、酪農協のブランド牛乳配達を30年以上も続け、地域社会へ酪農の存在意義をアピールしている。

最後に幼稚園、小学校の子供たちの見学受け入れも毎年行っており、地域社会から親しまれている。

5 後継者確保・人材育成等と経営の継続性に関する取り組み

当牧場では「牛・草・土に感謝」を経営理念として行っており、それが生活の基礎となっている。家族で一つの目標を持ち、ゆとりある酪農経営を営んできたので長男も自然に後継者となった。

また、昭和40年～50年代に入ると自家産牛の改良成果が表れ、全共出品者の常連となり、全国的に有名になり、ブルーバンブーという冠ネームは広く知れ渡った。その頃になると雑誌等でも多く取り上げられ全国各地から研修生が集まるようになった。今までに受け入れた研修生は46名になり、多くの若きディリーマンを育てている。研修生にも優良牛を譲渡し全国にブルーバンブーという名牛が広がっている。

6 今後の目指す方向と課題

現在は四世代の大家族で成牛35頭規模の「仕事・時間・お金のすべての面にゆとりある酪農経営」を行なっている。したがって婦人達は経理と家事などに専念し、ほとんど酪農の労働には手を出していない。しかし今後の酪農動向、業界全体としての進むであろう方向を考えた場合、次のようなことが課題となり検討している。

1) さらなる飛躍、果てし無き夢を求めて

酪農は始めて以来、毎日の乳量測定と登録は酪農経営の基本と考えて実施してきた。特に登録改良については、30年にも及ぶ努力が実を結び本年5月に県内初のエクセレント牛が誕生した。しかも自家産牛に改良に改良を重ねてきたというすばらしい成果であった。

また、更なる飛躍をし、果てし無き夢の実現に向けて努力していく。

2) フリーストール、パーラー、TMRの大規模酪農へ

後継者も就農約5年になり若い人には若い人なりの酪農に対する夢と希望がある。今までは少数精鋭の酪農形態であったが、今後においては後継者の意向も検討し、新しい時代に合った酪農経営を展開していきたい。

3) 土・草があってこそ牛がいる

本経営の土台である「土づくり、草づくり、牛づくり」の実践として今後においても確実に行なっていきたい。特に土・草づくりについては、河川敷での良質粗飼料生産が今後の大きな課題である。自家堆肥の還元による土地改良、また高品質高収量の粗飼料確保に努めていきたい。